

OB 紹介

樋口 浩二さん
(平成十五年入学)
中国新聞社 松江支局

○仕事内容

簡単に言うと、新聞の記事を書く仕事をしています。私は、島根ブロックで働いていて、主に中国新聞の島根版を担当しています。また、県政を主に担当しており、普段は県庁にいます。

日々やっている仕事は、人に会って、話を聞いて、記事を書くということですね。そして個人個人でその分野が分かれています。入社したての1年生はたいいてい警察を担当します。事件・事故を取材して、その事実関係や背景を記事にします。他には県政、市政、また、遊軍という、行政の枠にとられずに、気象や教育、イベントなどを取材する部署もあります。

また、私たちは出稿部という記事を出す方の部署ですが、記事のレイアウトや見出しを考える整理部という部署もあります。

○仕事のやりがい・魅力

やりがいは仕事はつきりと形になることですね。例えば、自分なりに面白いと思った記事を書いた次の日の朝は記事を読むのわくわくします。行政を担当していると、行政にとって手厳しい意見も書くわけですが、たとえ厳しい意見でも、その真意を読者や取材対象の人に納得してもらえたときは小さなうれしさを感じます。

また、和やかない話を書くことがたまにあつて、書いた人や、一般の読者から、良い話ですねと言ってもらえたりうれしいですね。昔、報道部の時に、「いい日」っていうコーナーがあつて、それを担当したことがあつたんです。いい日というのは、とにかく心温まるいい話を紹介するものでした。些細なことでもいい、良いことをとことん突き詰めて取材して書こうというコーナーです。これを一年生の時に先輩の記者二人で担当して、二人で取材をしたんです。でも何から取材をすればいいのかもわからなかつたんです。良い話ないですか？って公民館とかにいきなり

行って、とりあえずネタを探して来いっていう感じだったんですけど、意外にあるものでした。このコーナーでは、何も情報がない段階から自分の足で見つけて書くので、私たちの一番大事な、ネタを取ってくる能力が鍛えられたかなって思います。その時に一般の読者の方が、新聞社に感想を手紙で寄せてくれるようなこともあり、やりがいを感しました。

○なぜ中国新聞社に入ったのか

最初は先生になろうと思っていました。一応就職活動はやっていただけ、絶対どっかの企業に行きたい、というのはなかつたんです。先生の免許があつたから、教員に何となくなるのかな、ぐらいに思っていました。何社か民間を受けて、その中の一つが中国新聞社でした。何で受けたといえれば、普通の会社のサラリーマンはピンとこなくて、新聞って、活動自体が自分でネタ取ってくる場所から始まるから、たぶん自由度が高いんじゃないかなって思ったというのが正直な所です。マスコミ志望でずっとやってきた人も私たちの業界にはいて全国の大学には、ジャーナリ

ズーム論などのゼミまである大学もあります。そういうのを学んだ上で、時事問題を勉強したりして、マスコミを受けたりする人もいます。んですが、私は先生になると思っていたから恥ずかしい話ですが、関連の勉強はほとんどやっていませんでした。最初はきつかったですね。ひどく怒られていました。記事は数十万人の人に届くから責任が重いです。今考えたら分かるんですが、1年生の時はその責任が十分に分からなくて、よく上司に怒られていました。インターネットの匿名サイトなどでは好きなことを書けますが、新聞はそうはいかないですからね。ただ、新聞社というのは、「ある程度怒られて当たり前」と割り切っていました。個人的な思いとしては、最近は怒られ弱い人が多いのかな、と感じています。大学生活が楽しい半面、そのギャップで余計そう思うのかもしれないですが、あと、私は、新聞を取っていましたが、どうやって書くのか、という視点では全く読んでなくて、最初に書いた記事は全部直されました。今では直される割合はだいぶ減りましたが、あまり原稿を直されなくなるようになるまで5

年ぐらいはかかりました。

○なぜ総合科学部に入ったのか

出身は福岡なんですけど、九州を出たくて、一人暮らしがしたかったから、本州に行こうと思ってました。それに、学力的に広島大学を目指すのがちょうど良くて、頑張って勉強したらいけるかなというのも正直ありました。あと、しょうもないことですが、広島は福岡からそんなに遠くないし、ちょうどいい距離だったからというのがあります。そして、何をやりたいかっていうのがよくわからなくて。外国の異文化に触れるようなことがやりたいと思っていたんですが、曖昧だったから、明確な学部の志望が決められなかったんです。でも、総科だと当時で言えば、地域科学プログラムとというのがあり、外国のことを学ぶことができそうです。しかも、総科はプログラムを選ぶのに一年間の猶予がありました。とても曖昧な理由で参考にならないかもしれませんが周囲にはそんな人が多かったように思います。

私が地域科学プログラムに入った理由は、

外国の暮らしや異文化に興味があったのと、違う文化や生活習慣で生きている人に興味があったからです。そういう人たちとどうやったら共生できるのかを掘り下げたくて。世界の各地で差別があったり、戦争があったり、そういうことはなんで起こるのかなという点に興味があったんです。

最終的に私は卒論で、出身地の福岡県直方市にあった炭鉱について研究しました。八幡製鉄所に石炭を供給していた筑豊炭田で、その地下を掘っていた女性坑夫たちの日常について調べました。結局、外国の話や文化を学ぶと、自分の地元のことを何も知らないというところに行き着いたんです。だから、これはやっぱり知らないといけないと思いました。外国の文化や歴史を学んだ上で、一周して地元に戻ってきたというイメージです。

○総合科学部に入ってよかったこと

いろんな人と知り合えたのがよかったです。友達の就職先もみんなバラバラなんです。だから、いろんなものが得意な人と知り合えたのかな、と思います。それが一番ですね。

文理問わず友達ができるのは総科の特権だと思えます。それに、地域科学プログラムはすごい仲が良くて、最後には皆で下関市に旅行に行っただけです。そういう出来事はすごく思い出に残っていますね。

○総合科学部に入学して生かされていること

人間関係が広がったことによって、いろいろな話が聞けたことというのが、自分の肥やしというか、教養になっているのかな、と思うことはあります。

○大学生生活の思い出

楽しい思い出しか残ってません。みんなで鏡山公園でバーベキューしたり。島根の浜田の海に行ったり。オリキヤンは絶対に二年生の時のほうが楽しいですよ。一年の時って初めてのことでもよく分からないけど、二年生になつたら余裕が出て、二年生の方が楽しめるものだと思えます。

また、友達っていうのは作ろうと思ってるわけじゃなくて、自然にして仲良くなるものです。その人たちといることをやっ

て、今でもその人たちと会っているということ、それが宝です。会社で普段働いていると、やっぱり仕事の話を全部忘れて話をしたくなってしまうときがあります。そういう時に大学の友達がすごく支えになっています。

○今の総科生に一言

せっかく総科にはいろんな専攻の人がいるし、いろんな個性や特技を持った人もいるだろうから、そういう人たちと幅広く付き合っ、とにかく楽しい生活を送ってほしいです。私は社会人になって、それが財産になるということが身をもって理解できました。だから、勉強しろ、というよりも楽しいことを目一杯やって、多方面の人と仲良くなって、それを社会人になった時に糧にしてほしいなと思います。絶対にそれが財産になると思っています。

人付き合いや人間関係に尽きる気がしません。大学生活ではいろんな人との付き合い方を体験できるけど、それは社会に出ても一緒だと思います。

また、私が青木先生の研究室訪問に飛翔の

取材で行ったときに青木先生が言っていたことで印象に残っているのが、「西条にこもるな」という言葉です。西条は広大生ばかりで楽しいから、西条だけで生活しようと思えばできる。でもそれだと価値観が狭くなるから、狭い西条から飛び出さなさい、と言われてました。それは精神的にとどまらずにいろんな社会の人を見るべきだという意味だったんだと思います。私はこの言葉を一年生の時に聞いて、いい言葉だと思いました。だから、今の総科生にも送りたいですね。

【担当】

- 25生 大城 温子
- 25生 大塚 侑奈
- 25生 三山 まりこ
- 25生 森田 みなみ

OG 紹介



山田真理子さん
(平成十六年度入学)
広島大学 広報グループ

○仕事内容

私の所属する広報グループは、広島大学全体の広報の窓口として様々な業務を担っています。例えば大学のホームページや大学案内などの刊行物を通じ、学生や大学、教職員の動きを広く学内外に発信しています。また、中学生や高校生などのキャンパス訪問のお世話や、国内外からの問い合わせへの対応など、業務内容は幅広く、新しいことにも取り組んでいます。その中には大学公式の

Facebook & Twitter もあります。

その中でも、私は HU-style という学生向けの広報誌を担当しています。HU-style のスタッフは広大生なのですが、毎号皆で会議をして企画を決めていきます。学生の取材への同行や、学生からあがってきた原稿のチェックなども行っています。

○この仕事を選んだ理由や経緯

就職活動では、中国・四国地区国立大学法人等 職員採用試験という大学職員になるための試験を受けつつ、民間企業の採用試験も受けていました。実は、就活の時期になって、「この業種でこれになりたい！」という明確な夢がありませんでした。ただ、漠然と「人の役に立ちたい」という思いはありました。

最終的に、どの道を選べばいいのか、どの環境において一番自分らしく生きることができるのかを考えたときに、大学職員の仕事は、学生や教員、地域の方の役に立てる、と自然にイメージできたので、母校で働くことを選びました。面接や職場訪問で出会った職員の方達の雰囲気良さも、決め手になりました

ね。

○仕事のやりがいや魅力

今年の四月に広報グループに配属になり、今の部署では HU-style 七月号が初めての大きな仕事になりました。これまでの配属先では今ほど学生と接する機会がありませんでした。締め切り前などは大変なときもありますが、学生と一緒に話し合いや取材をし、なにかを創ることにとってもやりがいを感じます。また、さまざまな挑戦をしているスタッフや、取材で出会う学生の話を聞くたびに、自分も頑張らなければ、と元氣と刺激をもらっています。

○総合科学部への進学理由

就職活動同様、受験の際にも自分がなにを学びたいのかが分かかっていませんでした。そんなときに、文理両方の分野が学べ、多角的な視点が育つ、という総科のパンフレットを見つけました。オープンキャンパスに参加し、本当に多様なプログラムがあることを知りました。入学後に数あるプログラムの中から

自分のやりたいことを選べるというのも魅力でした。また、大学では学部により専門を限定するのではなく、何でも勉強したいと考えたことも総科の受験を決めた理由です。

○アメリカへの留学

大学三年の後期から四年の前期にかけて HUSA プログラム (USAC) で、ネバダ大学リノ校へ留学をしました。最初は大学のキャンパスにある語学学校で学び、後半から学部や大学院の国際関係の授業も受講しました。現地の学生に負けまいと深夜まで図書館で勉強し、成績で ▶ がとれた時は本当にうれしく、自分への自信にもつながりました。

○留学したきっかけ

私の地元山口県岩国市には米軍基地があり、身近なところに、アメリカ人家族の方達の通訳やサポートをしている人がいました。幼い頃からそうした光景を見ていたので、英語は全く話せなかったものの、「外国語は受験科目ではなくコミュニケーションのツ

ル」という意識が自然とありました。また、英語を使っていろいろな国の人と話ができたらいいな、とも思っていました。大学に入学し、サークル漬けの毎日の中、今しかできないことはなにか考えた時に自然と、留学を意識し始めました。5人の子供を育て大変な中、いつも私のやりたいことを応援してくれた両親には今でもとても感謝しています。

○アメリカで働いた体験について

この四月まで、文部科学省の実施する研修に参加し、一年間アメリカで暮らしていました。この研修は、日本の大学の国際化を促進するため、大学職員に国内外で国際的な業務や経験を積ませるもので、文部科学省にある大学の国際化を促進する部署で一年間勤務を行った後、渡米しました。最初の三カ月はワシントンDCでアメリカの高等教育行政について学ぶとともに、政府、教育関係の政府機関やその他の団体を訪問しました。その後九ヶ月、オクラホマ州にあるタルサ大学という小さな私立大学の国際オフィスで勤務しました。

学生時代の留学のおかげで、多少英語が理解できるものの、特にオクラホマ州や自分のいた町はアジア人も少なく(初めて日本人をみた、と珍しがられることも…)、ネイティブ同様のスピードで話され、最初は苦労しました。南部は外国人に保守的、と一般的にいわれますが、職場の同僚や町の人は本当に親切で、家族のように接してくれました。

○大学時代の専攻や研究内容

実社会で起きている問題に興味があったので、当時の環境共生科学プログラムで、国際法や国際関係、社会問題を中心に学びました。ただ、三年後期と四年前期に留学をしたため、帰国後に専門や所属のゼミというものがありませんでした。帰国後すぐに卒論の執筆になったため、最初は何を書こうか悩みました。海外にいたこともあり、日本における外国人の問題に興味を持っていました。そこで、広島自動車関連企業等で働く日系ブラジル人の出稼ぎ労働者の子供たちの教育や心理的な問題に目を向け、日本の外国人政策やその問題点を取り上げることになりました。

○大学時代の部活やサークル

Fineshotというテニスサークルで、本当に朝から晩までテニスをしていました。卒業してもいまだに集まる仲間達は、大学で得た一生の財産です。サークルでは年二回ある合宿の企画を担当していたのですが、百人以上の団体の合宿は、宿探しから企画準備まで本当に大変でした。大きなことを、仲間と協力し、成功させる、ということが初めての経験だったので、合宿係の仕事を通じ、「ものをつくる」という新たな楽しみをみつけることができました。

○大学で学んだことや培った能力が社会でどう生かされるか

大学を卒業した次の日から大学で働きはじめたので、大学や学生生活についてある程度知っており、分らないことだらけ、ではありませんでした。(今は、働けば働くほど、こんなにも他の学部や研究について知らなかったのかと思いきらされるのですが…) 最初は留学担当の部署に配属になり、私は広大生の留学を担当していたため、学生にア

ドバイスをする上で自分の留学経験がとても役に立ちました。

また、卒論を書く中で得たことがあります。最初はインターネットや本から得た情報をもとに、自分なりの考えをまとめていたのですが、指導教員の佐々木浩先生から、「人の意見を鵜呑みにするのではなく、自分の目で問題をとらえ、人と直接話をしてこそ、「自分の」意見が生まれ、卒論が書ける」と教えられました。社会学で扱う複雑な問題は、取材相手に歓迎されず調査が一筋縄でいかないこともあり、解決策も簡単にはできません。それでも自分で足を運ぶことの大切さを教わり、現場にいつて、厳しい現実を知り、率直な話を聞いたことで、多くのことを学びました。「受け身にならず、自ら情報を集め、そこから企画・提案をする」という社会人に必要なスキルの一歩目は、大学で学ぶ姿勢の中から磨かれる、と今改めて感じています。

○将来の目標

大学の中には研究支援、学生支援、地域貢献など、学生の皆さんが知らないような幅広

い業務があります。私はまだまだ大学職員として未熟で経験が少ないので、今後も幅広い業務を経験したいです。また、学生が広大の事を好きになり、広大来て良かったなど思ってもらえるよう、母校がますます良い大学になるよう、自ら提案をし、実行に移せる職員になりたいと思っています。

○人生に影響を与えた人や言葉

文科省で働き始めた当初、自分の意見を述べたり、議論をする際、無意識に「広島大学」が自分の基準になっていました。そんなとき、上司から「広島大学さえよければいいのか。何のために働いているのか。日本や世界の教育、未来の子供のために働こうとしないと、大学職員としての成長はそこまでだ。もっと広い世界を見ろ。」と言われました。「日本の大学は広大だけではない。大学に進学しない人もたくさんいる。日本のように教育制度が整っていない国もある。日本の若者達が、世界の人と協力しなければ日本自体の将来も危うくなる中、広大のために仕事をしていくのか。」と聞かれたときに、自分が何のため

に働いているのか、働きたいのか初めて考えましたね。もちろん広大の学生や地域のために働くことには変わりありません。しかし今は、自分の仕事の先にあるのは、社会や世界、未来の子供達なのだ、と広い視野でものごとを考えるようになりました。

○総科生へ一言

まず…飛翔はもちろん、学生スタッフが一生懸命作っているHU-styleを読んでください！(Webでも読めます。そしてスタッフを募集中です！笑)総科のメリットは、カリキュラムも柔軟で色々な勉強ができるということにあると思います。今自分のしたいことが決まっているのであれば、ひたすら突き進むのもよいと思います。一方で、今なにをしたいのかわからない時期、というのもチャンスです。あせらず、思い詰めず、短期の留学に挑戦したり、職員や先生方と話をしたり、学内外であるイベントに参加してもよいと思います。私は総科のスタジアンを着て、経済学部、法学部、教育学部の講義に乗り込んでいていました(笑)

広報グループで働いていて、毎日新しい驚きがあるほど、広大生や広大はいろいろな挑戦をしています。どこか遠くへ行かなくても、お金を払わなくても、人の話を聞き、新しいことに挑戦し、仲間を見つけるチャンスはたくさんあります。もみじや広大のホームページなど情報網を使って、今しかできないことに積極的に挑戦してください。

【担当】

25生 上江洲 まどか

25生 小林 美月